

# Governor's Newsletter for ACP Japan Chapter



Governor : Fumiaki Ueno 上野文昭  
MD, MACP

## 支部長挨拶

■上野文昭 P 2

## 支部総会会長より

■米国内科学会 (ACP) 日本支部年次総会・講演会のお知らせ / 柴垣有吾 P 3

## 委員会報告

■Credentials/Membership Committee / 新谷 英滋 P 4

■ACP Japan Chapter, Local Nomination Committee (LNC) の紹介 / 平和 伸仁 P 5,6

■Health and public policy committee (HPPC) の活動 / 小山 雄太 P 7,8

■米国内科学会 ACP 日本支部国際交流プログラム委員会 / 矢野(五味) 晴美 P 9

■Olive View Medical Center での研修について / 城下彰宏 P 10,11

■Olive View-UCLA Medical Center での研修を終えて / 山本たける P 12,13

## 会員からの報告

■Primary Care を担う Internist & family physician / 板東 浩 P 14,15

## 新たに FACP になられた先生のご紹介

■廣川 誠 / 上浦 望 / 栗田 宜明 / 西脇 宏樹 / 安尾 和裕 / 渡邊 一司 / P 16

## 委員のご紹介

■委員会名簿① / P 17

■委員会名簿② / P 18

■委員プロフィール / P 19~21

## 編集後記

■大島康雄 / P 22

## 小さくても豊かな医療



支部長  
上野 文昭

ブルネイの医療施設を視察する機会がありました。ブルネイと言ってもピンとこない方も多いと思います。ボルネオ島マレーシアに囲まれた三重県ほどの国土面積に 40 万人が住む小国です。ところが豊富な天然資源の恩恵で、途方もなく豊かな国で、世界で 2 つしかない☆☆☆☆☆☆(7 つ星) ホテルもこの国にあります。実際、人口 40 万のうち 10 万人は、仕事を求めてこの国に来ている外国人居住者です。国の財政基盤が十分なため税金はなし(もちろん消費税も)、そして医療費は無料です。さぞかし立派な、最新鋭機器が揃った、王様の医療を提供するような施設を想像しつつ、現地の関係者の案内を受けることになりました。

事前のブリーフィングによると、総人口 40 万人の年齢構成は 20 代後半から 30 代前半がピークで、65 歳以上の高齢者は極端に少なく、これに対し 700 人の医師が 4 つの病院で診療をしています。高齢者層が少ないことは日本との大きな違いですが、死亡原因の上位は悪性腫瘍、心疾患、糖尿病、脳血管障害などほぼ同様です。

さて、最大規模の王立病院に案内された途端、正直なところ拍子抜けしました。広々とした清潔な病院ではありますが、豪華さは微塵も感じられず、むしろ質素な印象です。画像診断や内視鏡機器なども、必要なものは一応揃っているという程度で、日本では個人クリニックにもあるような最新鋭機器は見当たりません。「医療設備の充実=よい医療」と錯覚している日本人が見れば、レベルの低い病院と捉えられるでしょう。しかしアポなし訪問した中堅消化器内科医との短時間のディスカッションでは、基本的な臨床能力は中々高いと看破できました。「お金があり余っているのだから、もっといい物を買って貰ったら」という意地悪な指摘には、「別に困ってないし、これで十分」と動じることはありません。そういえば国内に医学部がないため、ほとんどのブルネイ人は臨床医学の教育と卒後研修を提携しているニュージーランドの大学で受けているとのこと、さすが英国圏の無駄のない医療を吸収しているようです。

生活全般も同様に地味です。親から独立すれば国の補助で一軒家を持つことを奨励されていますが、広々としているだけで華美ではありません。誰もが保有している車も、中型から小型の日本車が多く、贅沢三昧という気風が全く感じられません。本当に裕福な人たちは背伸びせず、身の丈に合ったものを求め、そこに十分な幸せを感じていることが段々とわかってきました。

昨今の日本の医療を振り返って、複雑な気持ちになりました。強迫観念に駆られたように新しいものを追求し、ありとあらゆる検査や治療を求める姿勢が支配的です。その効果に関するエビデンスがあったとしても、異なった価値観はあるはずです。ましてエビデンスが希薄な新規医療までもてはやす風潮は慎むべきでしょう。ACP の提唱する High Value Care や日本にも上陸した Choosing Wisely Campaign は、今、われわれが直面している無駄でむしろ有害な医療を、科学的妥当性をもって抑制しようという動きですが、アジアの小国ブルネイでは、自然体で実践しているかのような印象を受けました。

今年も ACP Japan Chapter 年次学術集会在 6 月 10, 11 日に京都大学で開催されます。そこでは最先端技術や新規治療薬の話題はありません。臨床内科医が社会に役立つために身に着けるべき知識と基本技能を学べる場です。小さくても豊かな医療を感じ取ってください。国民が一生懸命働いて国の経済を維持している日本は、見かけほど裕福な国ではないはずです。保健医療だけのために国全体を不健康にしてはなりません。背伸びしない、身の丈に合った医療が、国民を、そして国全体を幸せにするのではないかと考えています。

## 米国内科学会 (ACP) 日本支部年次総会・講演会のお知らせ



SPC 委員長・年次総会 2017 会長

柴垣 有吾

Scientific Program Committee 委員長の柴垣有吾です。今年度も、米国内科学会 (ACP) 日本支部年次総会・講演会の会長を務めさせて頂きます。何卒宜しく願い申し上げます。

この度、本会の一般演題ポスターセッションの演題募集、プログラム紹介とその参加登録、さらに病院展示ブース募集を開始しましたのでお知らせ致します。本会は 2017 年 6 月 10 日(土曜日)・11 日(日曜日)に開催致します。本年度から、例年の京都大学百周年時計台記念館に加えまして、近接する国際科学イノベーション棟の 2 か所に開催場所を増やす事でより多くの魅力的なセッションを行うこととなります。是非、本会のホームページである <http://www.acp2017.org/index.html> を訪れてみて下さい。

今年のテーマは、『スペシャリストとともに支える日本の GIM 診療 (GIM practice in Japan: Growing roles of general specialists)』とさせて頂きました。本邦においては内科医の多くは、医学部卒業後にサブスペシャリティ研修を行っていることが多く、真の意味で総合診療のフィールドのみで育った人はマイノリティであると思われれます。一方で、超高齢社会で患者のほとんどが多併存疾患 (Multimorbidity) を抱えており、GIM 診療の重要性は増すばかりです。GIM とサブスペシャリティは相反するものではないこと、多数がサブスペシャリストである現実がある中で、サブスペシャリストが general mind をもって、multimorbid な高齢者の診療を総合診療医と協力しながら担っていくことが必要となっています。今回のプレナリーセッションでは、スペシャリストだが地域や病院のニーズのため GIM 診療をしている医師、スペシャリストだが GIM の能力があり魅力を伝えらえる医師をシンポジストとして、今後当面は続くと思われるスペシャリストに支えられた日本の内科診療において、どのように GIM 診療を底上げできるか、その方略を議論する予定です。

その他、昨年、大変に好評を得ました若手研修医の施設間対抗クイズトーナメントである Dr' s Dilemma、ポスターディスカッションセッションに加え、前 ACP 会長の Nitine Damle 先生を演者としたセッションを用意しています。さらに、例年のように多数の教育的なセッションやランチョンセミナーを企画しております。プログラムは調整の最終段階となっており、2 月下旬に公開予定です。

本会は企業などの支援を受けず、手弁で行う臨床医による臨床医のためのアカデミックな会です。そのため、参加費は通常の学会より高いものとなっておりますが、それでも「来て良かった」「ためになった」と言われるような満足度の高い会になると自負しております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## Credentials/Membership committee

委員長  
日本医科大学大学院 微生物学・免疫学分野

新谷 英滋



Credentials/Membership committee は、米国内科学会 ACP 会員の上級会員 (Fellow) 昇進の審査、ならびに入会などに関する問い合わせへのお答えなどがおもな仕事です。それに加えて、会員、準会員、学生会員、関連会員 (Affiliate Member) などの会員資格全般に関する資格要件を、ACP 本部で制定されたものから日本の制度の実情に合わせた形にして、日本の医師が ACP 会員になりやすい形にしていることもこころがけています。

委員会の業務はメールによる連絡のみで行っておりますので、日本各地の、開業の先生方、病院勤務の先生方から大学勤務の先生方まで様々な先生方に委員として活動していただいています。委員の数は 2016 年 7 月より 3 名増員され、現在は委員長を含め 11 名の委員で構成されておりますので、Fellow 申請が集中する季節にも各委員にはあまり負担にならない形で対応出来る体制になっております。

Fellow 申請に関しましては、当委員会は皆さんの昇格をお手伝いするというのが基本的姿勢です。そのうえで、チェックシート、CV などの要訂正部位、要変更点を指摘したりすることもあります。申請される先生方には、当委員会の審査結果で種々の指摘があった場合も、それを前向きに考えて頂き、指摘を参考にして、よりよいチェックシートあるいは CV を作製していただいたうえで迅速に再提出していただければと思います。

なお、当委員会委員は、Fellow 昇格審査をするという関係で Fellow 以上の会員資格が必要とされています。FACP に昇格された先生方の Credentials/membership Committee へのご参加ご協力をお待ちしております。

## ACP Japan Chapter, Local Nomination Committee (LNC) の紹介

Local Nomination Committee 委員長  
横浜市立大学附属市民総合医療センター 血液浄化療法部長／腎臓・高血圧内科

平和 伸仁



今回、ACP 日本支部の Local Nomination Committee の紹介をさせていただくことになりました。LNC の名前を聞かれたことはありますか？私たちは、ACP 日本支部の活動に貢献した会員あるいは人・組織に対して、さまざまな Award により評価・顕彰するために活動しています。さらに適切な方がいらっしゃった場合には、MACP の推薦、また、ACP の日本支部の支部長の推薦など、大変重要な活動をしています。そして、ACP 日本支部の総会では、受賞者に対する表彰を行っています。昨年、ACP 日本支部総会の初日、レセプションにおいて、ACP Immediate-past President である Wayne J. Riley 先生と上野文昭支部長、黒川清 前支部長より、盾や表彰状が直接手渡されました。

さて、LNC で差し上げている賞には、どのようなものがあるのかご存じでしょうか？ Laureate Award、Volunteerism Award, そして Sakura award があります。さらに、昨年より、ACP Japan Chapter Contribution Award を新しく作成し授与を開始しました。簡単にこれらの賞について、ご紹介いたします。

### 1. Laureate Award

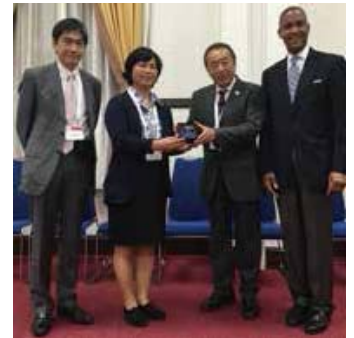
ACP 日本支部における最も名誉ある賞で、日本支部の発展に長年にわたり尽力された会員に授与されます。本賞は、ACP 日本支部の理事会または LNC で推薦者を選出し、LNC で審議され、理事会で承認され、授与が決定いたします。過去の受賞者として、2009 年 石橋大海先生、2011 年 上野文昭先生、2012 年 黒川清先生、2016 年 小林祥泰先生、前田賢司先生など、錚々たるメンバーが選出されています。



### 2. Volunteerism Award

本賞は、医療、福祉、教育に関してボランティア活動として多大な社会貢献をされた ACP 日本支部会員を表彰することになっています。基本的に、ACP 会員は、日頃から素晴らしい医療を提供していると考えられており、すべての会員が受賞されても良いと思われませんが、自分の日頃の仕事とは別に、ボランティア活動に成果を上げている先生に賞を差し上げています。本賞は、ACP 日本支部会員より推薦を受け、当 LNC で審議し、理事会での承認を経て、受賞者が決定します。

推薦は、『候補者が医療、福祉、教育に関してボランティア活動として、どのような社会貢献をされたか』について文書による推薦状(書式は自由)を作成していただき、ACP 日本支部 LNC に提出することにより行なわれます。



過去の受賞者(敬称省は略)は、2006 年 横井徹、2007 年 井出広幸、2008 年 川本龍一、2009 年 石塚尋朗、中村浩士、2012 年 宇野久光の各先生です。昨年は、感染症の教育活動が評価され、矢野晴美先生が受賞されました。

### 3. Sakura Award

Sakura Award は、ACP 日本支部の発展、活性化に多大な貢献をされた基本的に ACP 日本支部の会員以外の方を表彰します。2009 年に新しく作成し、Dr. David Gremillion が初めて受賞されました。Gremillion 先生は、ACP 日本支部総会における教育や日本のさまざまな病院における米国式の臨床医学の普及に貢献され、表彰されました。2011 年には、長く ACP 本部と日本支部の架け橋となりご協力いただいた Ms. Eve Swiacki に対して、また、昨年は Olive View – UCLA Medical Center 医学部長の Soma Wali 教授が、ACP 日本支部の学生会員を含めた多くの日本の医学生へのオブザベーション臨床研修あるい

はエクスターン研修などの受け入れをしていただいたことを評価され受賞されました（盾は、ACP Internal Medicine Meeting 2017 の日本支部レセプションにて差し上げる予定です）。この選考基準は、ACP 日本支部会員より推薦を受け、LNC で審議し、理事会へ推薦することになります。推薦する場合は、『候補者が日本支部の発展、活性化にどのような貢献をされたのか』を記載した推薦状（書式は自由）を ACP 日本支部 LNC に提出していただきます。

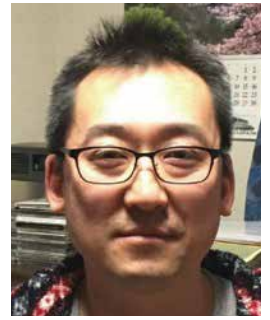


#### 4. ACP Japan Chapter Contribution Award (ACPJCCA)

ACP に長く貢献してくださっている会員に積極的に差し上げることがきる賞として、昨年、設立しました。ACP の活動は、基本的にボランティアで行われているため、継続的に貢献している会員には、さらなる継続的な貢献を期待して積極的に贈呈します。よって、本賞は、ACP 日本支部の会員であり、ACP の活動で貢献されている方を対象とします。日本支部会員および LNC による推薦者を LNC で討議して、理事会で承認された場合に決定します。初年度の受賞者は、野村英樹先生、小原まみ子先生、(故)遠藤正之先生の 3 名でした。今後も多くの先生方に差し上げたいと思っています。

いかがですか?いろいろな賞があることがお分かりになりましたでしょうか。これらの 4 つの賞は、ACP 日本支部総会において、表彰されます。皆様も受賞の可能性がありますので、ぜひ、ご推薦ください。特に、Volunteerism、Sakura および ACPJCCA 賞は、ACP 会員による推薦を受け付けています。受賞に値すると思われる先生がいらっしゃった場合には、積極的にご推薦いただければと思います。読者の皆様の ACP 日本支部における、継続的ますます活発な活躍を期待しています。

## Health and public policy committee (HPPC) の活動



委員長  
日本海総合病院 腎臓膠原病内科  
小山 雄太

今期 HPPC 委員長を拝命した小山雄太@山形県酒田市・日本海総合病院です。宜しくお願いいたします。

HPPC といっても馴染みが薄いのではないかと思います。ACP 日本支部(ACP-JC)で各委員会の委員を募集する際の、HPPC について書かれた文は

「HPPC の委員会としての役割：医師の倫理とプロフェッショナリズムに則って、ACP 日本支部の立場を表明する委員会です」

となっています。

医師として本来あるべき姿や模範とすべき拠り所は、日常診療や日常生活に忙殺されていると忘れてしまいがちですが、できれば忘れずにいたい、あるいは折に触れて思い出したい、という気持ちを、何とか形にして皆さんに知ってもらいたい、というのが活動目標だと言ってもいいかもしれません。

これまで HPPC 活動は大生定義先生(立教大学)や野村英樹先生(金沢大学)に牽引していただいて進められてきました。最近の活動としては、

- ・ ACP 日本支部としての COI policy 試案を作成・提案する  
<https://pdfs.semanticscholar.org/58d2/01d503097ef86e0c56fd e4ad117354d608c8.pdf>
- ・ 上記試案作成にあたり参考にした JAMA 論文 (Professional Medical Associations and Their Relationships With Industry. A Proposal for Controlling Conflict of Interest. Rothman DJ, et al. JAMA 301: 1367-1372, 2009)を翻訳し解説する  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/naika/103/1/103\\_181/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/naika/103/1/103_181/_pdf) などがああります。利益相反 (COI) に関する問題は種々みられておりますが、企業からのバックアップを受けずに学会を開催している ACP 日本支部としては、その問題について検討し一定の見解を出す上で今後もアドバンテージがあると考えています。これらの実績をもとに、2016 年の ACP-JC 総会では、野村英樹・前委員長や小野宏・現副委

員長を中心に「利益相反、学業不正、研究不正—プロフェッショナルはどう行動するか」と題したセッションを企画させていただき、ジョナサン・ハイトの「The Righteous mind (邦訳：社会はなぜ左と右にわかれるのか)」という本を参考にしつつ利益相反、レポート剽窃、研究不正という社会的な問題について考察し、ワールドカフェ方式でディスカッションを行うことができました。ともすればデリケートで対応しにくいテーマについてのセッション企画であったにも関わらず快く承認くださった ACP-JC 支部長・上野文昭先生はじめ総会運営の皆さんにこの場をお借りして深謝いたします。

上に記した活動、つまり「医のプロフェッショナリズム」とは何ぞやということより理解し、普及推進していくことは昨年度から引き続いて今年度も進めていきたいと考えているのですが、そのほか、今期(以降)の活動目標として皆さんにお知らせしたいものは以下の事項があります。

### 1. Choosing Wisely に関して ACP-JC として情報発信する

2012 年に米国内科専門医機構財団 (ABIM foundation) が開始したキャンペーン活動である Choosing Wisely は、患者にとって本当に役立つ医療を「賢明に選択」できるような土壌やツールを作っていく、医療職がそのプロフェッショナリズムに基づいて患者と対話を促進して意思決定を共有していこうという試みとして広められてきました。ABIM foundation の呼びかけに対して、全米の臨床系専門学会は根拠となる文献とともに各分野における「無駄な医療」を合計 400 近くリストアップしましたが、国内の反響も大きく、現在まで国際的に広まってきています。昨年秋、一般社団法人医療の質・安全学会「過剰医療検証と Choosing Wisely キャンペーン」ワーキンググループ (代表：小泉俊三先生)の主催で、Choosing Wisely Japan キックオフセミナーが開催され、そこでは上野文昭 ACP 日本支部長も講演されましたが、会の最後に Choosing Wisely Japan 設立が宣言されています。

日本でもこの活動が広まっていくことが期待されていますが、ACP-JC として、この活動に参画あるいは協調して情報発信することは望ましいことですので、今期 HPPC 委員に加わっていただいている徳田安春先生からもお力添えをいただき、HPPC の活動として進めていきたいと思えます。これは ACP のホームページに掲載され紹介されている High Value Care にも通じる内容であり、しかしこれはお国柄の違いもあって米国流がすなわち日本流とするのには難しい面もありますので、どういう形にすると日本では一層しっくりするのかについても考察していけたらと考えています。

## 2. 日本の実情に即した End of life care について検討する

End of life care も ACP のホームページに掲載されている重要なテーマです。癌治療や透析医療など、この分野の考え方が必要な場面は数多くあり、High Value Care 同様に日本の実情に即した形の End of life care を ACP-JC として模索し形にしていくことも（実に難しく壮大なことではあるのですが）HPPC の活動として重要であると思っています。

## 3. COI に関して

上記活動と並行して、日本支部としてはやはり本部の意向というか方針というか、そういう事は把握しておかなければなりませんので、COI に関する ACP 本部の姿勢を解析して日本支部の皆さんへ還元することも追求する予定です。



以上、HPPC としての活動を簡単にご紹介いたしました。活動にあたっては今後も日本支部の皆さんからお知恵をお借りすることが多々あると思いますので、今後ともご指導のほど宜しくお願いいたします。



## 米国内科学会 ACP 日本支部国際交流プログラム委員会



委員長  
筑波大学

矢野(五味) 晴美

国際交流プログラム委員会は、ad hoc committee (特別暫定委員会)として2011年秋に発足し、2012年から臨床見学のための交換プログラムを開始いたしました。

臨床見学先は、前委員長、兼 前日本支部長の小林祥泰先生のご尽力で、カリフォルニア州立大学ロスアンジェルス校の教育病院であるオリブビュー・メディカルセンターです。ACP member/associate member の会員医師(応募時に会員申請可能)を派遣しております。

### ○ 募集サイト

[http://www.acpjapan.org/info/20160525\\_145/](http://www.acpjapan.org/info/20160525_145/)

年間最大 12 名の受け入れが可能です。臨床見学の希望は随時受け付けております。希望者は国際交流プログラム委員会事務局へご連絡をお願いいたします。当委員会では、希望者が渡航できるように最大限、サポートさせていただいております。

2012-16 年の 4 年間に合計 16 名の派遣実績 (1 名は 2017 年 4 月予定) があります。2017 年 6 月 10-11 日開催予定の ACP 日本支部年次総会で、体験者による体験報告会・臨床見学の説明会を計画中です。

### ○ 体験者の体験報告のサイト

[http://www.acpjapan.org/info/20160525\\_146/](http://www.acpjapan.org/info/20160525_146/)

2012-16 年の派遣者リスト 16 名 (1 名は 2017 年 4 月予定)

Candidate No.	Last name	First name	日本語名	Specialty		Month	Year
				General Medicine Wards	Consultation service		
2012-13							
1	Uemura	Takeshi	植村健司	Internal Medicine	No	September	2012
2	Shimamura	Shonosuke	嶋村昌之介	Internal Medicine	Infectious Diseases	February	2013
3	Minobe	Shoko	美濃部祥子	Internal Medicine	Hematology/Oncology	February	2013
4	Isobisa	Ai	磯久愛	Internal Medicine	Rheumatology	May	2013
5	Cho	Narihiro	張成浩	Internal Medicine	No	May	2013
2013-14							
1	Tsuda	Moe	津田萌	Internal Medicine	Hematology/Oncology	January	2014
2	Muranaka	Emily	村中鋭英里	Internal Medicine	Infectious Diseases	May	2014
3	Soma	Shinke	相馬真子	Internal Medicine	Cardiology	May	2014
4	Sato	Ryota	佐藤良太	Internal Medicine	Critical care	June	2014
5	Tanaka	Takamasa	田中孝正	Internal Medicine	Hematology/Oncology	June	2014
2014-15							
1	Kuriyama	Akira	栗山明	Internal Medicine	Critical care	November	2014
2	Makishi	Tetsuya	牧石徹也	Internal Medicine	Nephrology	November	2014
2015-16							
1	Ishitobi	Natsuko	石飛奈津子	Internal Medicine	Critical care/ Emergency medicine	May	2016
2016-17							
1	Shiroshita	Akihiro	城下彰宏	Internal Medicine	Infectious Disease	November	2016
2	Yamamoto	Takeru	山本たける	Internal Medicine	Infectious Disease	November	2016
3	Hiroki	Nishiwaki	西脇宏樹	Internal Medicine	Nephrology	April	2017

臨床見学プログラム  
Olive View UCLA Medical Center, Los Angeles, USA  
受け入れ責任者 Dr. Soma Wali  
Professor, Director  
Department of Medicine  
Olive View Medical Center, University of California, Los Angeles, USA

以下で、2016 年 11 月の派遣者である城下彰宏先生、山本たける先生の体験報告をご覧ください。

## Olive View Medical Center での研修について



亀田総合病院 研修医 2 年目  
城下 彰宏

まずは海外留学の機会を作ってくださった矢野先生、Wali 先生、Norman さん、ACP に、そして留学についていろいろとアドバイスをいただいた牧石先生、小原先生に心からお礼申し上げたいと思います。

2016/11/7-2016/12/3 の期間 UCLA 関連 Olive View 病院を見学させていただきました。

僕は米国臨床留学を志している方々と違って米国に強いあこがれがあったわけではなく、きっかけは医学部 4 年生のときに友人が受験しようと頑張っているのを見て米国の試験に興味をわいて、そのあとはただ面白かったのですと ECFMG certificate をとっていました。

せっかくとったということ、あとは研修医 2 年目になってある程度自分の診療の型ができてきたため米国の医師と自分を比較してみたという思いから今回留学をさせていただきました。

今回の留学で学んだことはとても大きかったのでご紹介させていただきます。僕は Internal medicine ではなく専門科しか回っていないので経験したことには偏りがあると思います。専門科だけにしたのはコンサルトをされるような複雑な症例を数多く見たかったからです。

最初の 2 週間は感染症内科を回っていました。移民の多さもあり、感染症の鑑別の広さは日本にはない特徴だと思います。さらに HIV の罹患率の高さが鑑別を広げざるを得ない原因の一つだと思います。日本では見たことのない疾患にあふれていて、とても新鮮な毎日でした。コンサルテーションも毎日 5 人ほどいて、アテンディング 1 人とフェロー 1 人で回していくのはとても大変そうでした。このくらい忙しいのは臨床力向上には良い環境だと感じました。抗菌薬の使い方や入院退院に対する考え方は日本と違う点が多々あり、最初は戸惑いましたがこれらもまた考え方の違いなのだろうと思うと世界観が広がって良かったです。あとは、患者層が若いです。僕の病院は 80 歳代の患者はざらにいて 90 歳代もふつうに受診してきますが、ここの病院では 50-60 代が多くて、90 歳の患者が来たときはカンファレンスが

ざわつきました。これは肥満や訴訟の問題もそうですが、米国のプラクティスをそのまま日本にもってくるのはかなり危険だと感じました。しっかりと吟味することの必要性が身にしみました。

あとの 2 週間はリウマチ科、呼吸器内科を回っていました。外来メインの科なので入院患者が少なく多少物足りない感じはしましたが、日本での考え方と違うところもいろいろ発見できたので楽しかったです。一番驚いたのは患者の肥満と術者の手技の習熟の問題もあって EBUS の際は全例挿管するそうです。患者の数が少ないので仕方ないのですが確かに手技はあまり上手ではなかったです。

全体としては医師のプレゼンテーションスキルが高いと思いました。プレゼンの練習にかける時間もしっかりとって、実際の発表では堂々とわかりやすく発表しています。そしてカルテがとても見やすいです。コンパクトにわかりやすくまとめる力、これに関してはアメリカの病院のとても良いところだと思います。僕もプレゼンが苦手、ただあまり改善する努力をしていなかったのもちょっとへこみました。日本語でも彼らと同じようにプレゼンできるでは全く足りなくて、世界レベルの医師になるには英語でのプレゼンも彼らと同じようにできなくてはいけません。今後の自分の課題を見つけれられたのは本当に幸せです。発表しているレジデントの姿は本当にかっこよかったです。

モーニングレポートと言って研修医が実際に経験した症例を毎朝担当を決めてケースプレゼンの形で発表する会があるのですが、僕にとってはそれがかなり勉強になりました。適度な難問で、いわゆる一生に出会うことのほうが少ないまれな疾患というより、どこかで出会うことが想像される疾患が答えのことが多く、また解説もわかりやすく作られていました。

僕は学生時代にバングラディッシュに留学していて、その大学病院では 1 日で 100 人くらいの患者をフェロー 1 人で診なくてはならなくて、カルテも 1,2 行で 5 分未満の診療を強いられる環境でした。アメリカは逆に 1 人に 20-30 分かけることもまれではなく、丁寧に診療

を行っている印象でした。日本はその中間のような感じがします。それぞれの国に合った医療を行っている、どこの国の医療が優れているなどは思わないのですが、それぞれの国にそれぞれの良いところがありますし、だめなところを探せばいっぱいできます。それに1つの病院見学でその国の医療を分かった気になるのも危険だと思います。なるべくポジティブに考え、良いところを探すように努力をしました。

反省点としては日本でも僕はそうなのですが、公の場での発言に関してはちょっと積極性に欠けるところがあって、カンファレンスでの発言が極端に少ないことです。これは本当に僕のいけないところで、同時期に留学していた積極性の塊のような山本たける先生のことをとても尊敬し、僕も頑張ろうと思いました。あとは英語力です。カンファレンスの議論を聞き取れないこともありましたが、もっともっと英語力を身につけて誰とでも対等に議論できるようになりたいです。



Wali 先生と自分

1 か月を通して、英語力は向上しましたし、感染症の知識は確実に深まりました。米国で働くとはこういうことなのだというイメージもつかめましたし、略語であふれているカルテにも慣れました。プレゼンテーション能力を鍛えるという新しい目標もできましたし、英語能力の必要性も身にしました。いつもないがしろにしていたことの必要性をたたきこんでくれました。またなによりホテルで同室だった山本たける先生との出会いは一生の宝物です。

この1 か月はかけがえのない1 か月でした。このような機会を作っていただいたことを心より感謝いたします。



左から山本先生、Norman さん、自分

## Olive View-UCLA Medical Center での研修を終えて



愛知医科大学 総合診療科

山本 たける

私は米国内科学会（以下 ACP）日本支部国際交流委員会が主催する交換プログラムを通じて、米国カリフォルニア州ロサンゼルス市郊外にある Olive View-UCLA Medical Center（以下 OVMC）にて 2016 年 11 月に 4 週間の研修を行う貴重な機会を得たため、その研修について述べたい。

### OVMC について

OVMC は、ロサンゼルス郊外に位置する 400 床弱のベッドを有する急性期病院であり、現在カリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下 UCLA）の教育病院の一つである。そのため UCLA の学生や、全米の医学部からの医学生が多く研修しており、同病院での内科レジデントは高い人気を誇っている。また、もともと結核専門の病院であった歴史的背景があり、結核専門病棟を有する全米でも数少ない病院として知られている。OVMC の周辺地域はヒスパニック系の移民が多く、スペイン語しか話せない患者が多かった（そのため OVMC で働いている医師のほとんどは英語のほかにスペイン語を話すことができた）。全体的に貧しく、金銭面の問題と思われる服薬コンプライアンスの悪い患者もたくさん見かけた。

### Internal Medicine

私は Internal Medicine を最初の 1 週間見学した。一般の内科チームが 8 つあり、そのチームが病棟の患者のケアを行っていた。内科チームはインターン、レジデント、アテンディングで構成され、そこに数人の UCLA やその他の医学校からの学生が入る。実際にチームに参加すると、入院患者のプレゼンテーションの前に、レジデントが医学生やインターンと一緒にプレゼンテーションの準備を熱心に行っており、またプレゼンテーションの後は細かくフィードバックしているのを見て、教育体制が定着していると実感した。

また研修医の教育・レクチャーとしてモーニングレポート、昼カン

ファレンスがある。モーニングレポートは研修医が経験した症例検討、昼カンファレンスは講義が中心で、どちらも研修医が積極的に発言しているのが印象的だった。これらの時間は研修医の教育の時間として確保されており、その時間は仕事の途中であっても、研修医は参加することができた。これも日常の仕事が忙しいとレクチャーの時間には参加することが難しい日本の研修システムとの違いを感じた。

### Infectious Disease

残りの 3 週間は Infectious Disease を見学した。ID Consult チームに所属し、プライマリーチームからのコンサルトを受けた。平均して 5 件から 10 件ほどのコンサルトを受け、まずは ID fellow と resident で診察し、午後から attending と診察し今後の方針を決めるといった流れである。特に日本とは鑑別診断の量や種類に違いがあり、学ぶことがたくさんあった。例えば研修中に何例か coccidioidomycosis の患者がおり、実際にどのような検査を出すのか、どのように治療していくかを知ることができ、初めての経験でとても勉強になった。ID Consult チームに所属している間は ID Attending である Dr. Mathisen と共に研修することができた。ID に興味があることを伝えると、私に熱意を持って指導していただき、入院患者のプレゼンテーションする機会を与えて頂き、チームの一員として自然に参加することができた。また教育熱心で、カンファレンス中に簡単なレクチャーをして下さったり、逆に日本ではどのような治療をしているのかと聞いて、日本とアメリカでの医療の違いを知ることができ、勉強になることばかりであった。

また数日間は結核病棟の見学をした。アメリカは国土が広いので 5 つの行政地域に分けて、それぞれの行政が各区域を管理しており、ロサンゼルスはサンフランシスコを含めた西海岸地域に所属している。HIV の合併に伴うというよりは、ロサンゼルスにある貧民地区で結核が蔓延することが多らしく、2016 年はすでに 2 回アウトブ

レイクをしているとの説明を受けた。どうやって貧民地区の結核患者を管理するかということに、行政も頭を悩ましており、病院だけではなく行政も含めてアプローチしないとけない難しい問題だと再確認した。

### 総括

今回のプログラムに参加することで、米国の医学教育や医療システムを学ぶことができ、またたくさんの素晴らしい医師に出会うこともできた。このような貴重な機会を与えてくださった ACP の矢野晴美先生、牧石徹也先生をはじめ、ACP 日本支部の皆様、OVMC のスタッフの皆様方に深く感謝を述べたい。ありがとうございました。

## Primary Care を担う Internist & family physician

徳島大学 / 田岡病院

板東 浩



以前、米国で開催された ACP の年次総会に参加した際、私は Convocation Ceremony で非常に貴重な体験をさせて頂きました。従来、米国でも本邦でも、プライマリ・ケアの重要性が叫ばれてきています。米国においてプライマリ・ケアを担うのは、Internist や family physician, pediatrician であると、ACP の関連書籍や資料などにも記載されています。

私は従来 internal medicine の領域に加えて、primary care 領域でも活動を続けお世話も担当してきております。これらの社会活動が評価されたものと思いますが、2011 年には ACP から Volunteerism & Community Service を賜うことができ、関係者の方々に感謝しております。

本稿では、general internal medicine ならびにプライマリ・ケアの視点から話題を紹介させて頂きたいと存じます。

### 1. General な視点から

医学の歴史を振り返ると、3つの段階があるような気がします。

- ①当初は、患者の身体と心を含み全体を包括的に診る時期
- ②次の段階は、専門分化していき臓器別に診療する時代
- ③その後、細分化され過ぎた反省から再び general な視点に戻る回帰

このようなステージです。この中で general については、一般的、総合的、統合的、全人的などいろいろと訳されますが、現時点では総合診療が理解しやすいと思われます。以前には時代の流れが反映され、内科専門医の呼称は「総合内科専門医」となりました。「総合」が付け加えられたことで、広く対応できるプライマリ・ケアの重要性が示されています。

### 2. Primary care の重要性

米国では医学の専門分化が過度となり、1966 年 Mills レポートや Willard レポートなどでプライマリ・ケアの重要性が指摘されました。これも一因となり、70 年代から family medicine が次第に拡がること

に。その後、各医学校で family practice(FP) の基盤が築かれ、FP や family medicine(FM) を目指す医師である family physician (FP) が増加していきました。

関連した用語として、general practice(GP) あるいは general practitioner (GP) がみられます。GP は FP のレジデンシーが生まれる以前から活躍されてきた医師に対して使われていたのです。なお、ACP の会員である FACP を含む internist においてもプライマリ・ケアを担う重要な医師といえましょう。

### 3. ECFMG 資格と臨床研修

私事で恐縮ですが、私は大学卒業後、臨床を広く勉強したいと思って運良く ECFMG 資格を取得でき米国の family practice residency program で臨床研修をする機会を得ました。そのとき印象的だったのが、米国の卒前卒後の臨床研修制度や、practical で自由度が高い生活や文化です。

ちょうど私が在米していたとき、日本では家庭医懇談会などの議論が始まる時期でした。当時、厚生省の依頼により私がアンケートを作成し、全米 50 州すべての行政機関と医師会に送付しました。その結果と臨床経験を厚生省でプレゼンを行い、少しでもお役にたつことができ、嬉しく思っています。

また、臨床研修を行っているとき、米国の internist や研究職の researcher、またレジデントを教える educator などとも交流がありました。日本では、臨床、教育、研究という3足のワラジを履きますが、米国では守備範囲がはっきり定まっていることに驚いたことを思い出します。

### 4. グローバルな展開

プライマリ・ケア医学や家庭医療、総合診療、地域医療などを包含した国際的な組織が、世界家庭医機構 (WONCA, 1972 ~) です。正式名称は当初 World Organization of National Colleges, Academies and Academic Associations of General Practitioners/Family Physicians でした。

しかし、現在では、略称 World organization of Family Doctors に。現在加盟団体は世界 130 か国、約 50 万人の会員を擁します。

WONCA は世界各地で regional conference を開催してきました。日本は Asia-Pacific region に属し、2005 年に国際学会を京都で開催。7 カ国を含む South-Asian や European、African region などみられます。

一方、日本では、日野原重明先生が基盤を作られました。先生は米国のプライマリ・ケアの概念を本邦に紹介され、生活習慣病という用語を普及させるなど多大な貢献をされました。日本内科学会や内科専門医会では、たびたび日野原先生からご講演を賜ったことを思い出します。内科医はプライマリ・ケアを基盤として 1 つの専門領域を持つとよいと、お話をいただきました。

## 5. 国内における学術大会

1978 年に発足した日本プライマリ・ケア学会はいろいろな活動を広げてきました。そして、関連学会が合併して日本プライマリ・ケア連合学会の第 1 回学術総会が 2010 年に開催。現在、厚生労働省や医師会、日本内科学会など関連組織にもご理解やご協力を賜わり、活動を続けています。第 5 回大会は岡山で 4300 人、第 6 回は筑波大学で 5000 人、第 7 回は浅草で 5800 人が参集しました。

第 8 回学術大会は 2017 年 5 月 13(土)～14(日)に、四国支部を挙げてお世話を担当し、高松駅直結の国際会議場で開催されます。前日の 5 月 12 日(金)の午後から数多くの魅力あるワークショップが始まります。

大会のテーマは「総合診療が拓く未来～地域に新たな架け橋を (General Practice Opening a Path to the Future - Creating New Bridges to Communities)」です。いろいろな意味が込められており、四国にぴったりのスローガンです。第 4 回から 8 回大会まで一般演題数は 304, 388, 505, 558, 565 題と増加しつつあり、約 5000 人の集会になると予想しています。

## 6. 四国の魅力とスピリット

四国はおもてなしの島、愛ランドです。弘法大師の哲学が綿々と伝わる四国八十八カ所で知られてきました。四国霊場は発心の道場(徳島)、修行の道場(高知)、菩提の道場(愛媛)、涅槃の道場(香川)から構成されます。巡拝者が全霊場を廻ると、すべての煩惱を乗り越え解脱の境地に導かれるとされるのです。

八十八カ所巡りの仏心や実践と、プライマリ・ケア医学の哲学や発展には共通点が多くあるように感じます。平成 30 年度から従来議論が続いてきた新しい専門医制度が始まる予定です。日本プライマリ・ケア連合学会や日本内科学会、厚生労働省、日本医師会などで議論が進んでいます。

まさに、総合診療が新しい時代を拓くポイントとなる時期であり、さまざまなコーディネーションやリエゾンの展開が期待されます。ぜひとも第 8 回大会にご参加ください。そして、共に学びディスカッションを深めましょう。ネットワークがさらに拡大する有意義な機会となると確信しております。



## ○新たに FACP になられた先生のご紹介

新たに FACP になられた先生をご紹介します。ひとこと抱負もいただきました。おめでとうございます。

2016年7月1日付

この度、日本内科学会と ACP 日本支部の多くの方々のご支援により FACP に昇格させていただきました。専門は血液内科学ですが、この機会を励みとして丸山眞男氏の言われた教養人「あらゆることについて何事かを知っており、何事かについてはあらゆることを知っている人」を目指して内科学の研鑽に努め、ACP 日本支部に貢献できるように努力したいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

秋田大学大学院医学系研究科総合診療・検査診断学講座

**廣川 誠**



私は腎臓内科医ですが、現在は福島県立医科大学附属病院臨床研究教育推進部 (URL: direct.fmu.ac.jp) の責任者を務め、主に県内医療者を対象に臨床研究の教育と実践の支援を行っております。日本支部では Scientific Program Committee でお手伝いと、年次総会抄録査読委員長の任務 (2013 年 -2016 年) をさせて頂いております。今後も、臨床研究の教育を通じて、プロフェッショナリズムの醸成に貢献したいと考えております。

福島県立医科大学附属病院 臨床研究教育推進部

**栗田 宜明**



福島県立医科大学の西脇と申します。現在、福島で臨床研究の勉強をさせて頂いております。この度、諸先生方のご指導のおかげで FACP に昇格させていただきました。

今後も診療・研究・教育等を通じて内科学の発展に微力ながら貢献したいと思います。また ACP 日本支部の活動にも関わっていききたいと思います。よろしくお願ひいたします。

福島県立医科大学 臨床研究イノベーションセンター

**西脇 宏樹**



'94 東大卒。旧 4 内 (血液) を経て 5 年目から 11 年間、オホーツクの僻地で診療。知識と技術 (時に資格・肩書) の必要性を痛感。現在は都市部で苦手分野を含めて研鑽中。FACP の名に恥じぬよう、「人」を癒す医療を目指して自己研鑽に努めてまいります。

国立病院機構 旭川医療センター 総合内科

**安尾 和裕**



(氏名のみ紹介) **上浦 望**

2016年11月1日付

1998 年に岐阜大学医学部附属病院にて産婦人科専門医、その後愛知医科大学病院にて腎臓内科専門医、総合内科専門医、透析専門医を取得しました。現在は岐阜市を中心に診療をしております。腎臓・リウマチ・膠原病疾患、透析療法、婦人科健診、更年期障害を中心に臨床に従事しております。この度 FACP となり地域医療への貢献ができるように頑張っていきたいと思っております。

医療法人渡邊会 しま医院 腎臓内科・婦人科

**渡邊 一司**





○ 委員会名簿(2016年度)①

委員会	役職	氏名	所属
Credentials/Membership Committee	委員長	新谷 英滋	日本医科大学 医学部医学科
	副委員長	湯地 晃一郎	東京大学医科学研究所 附属病院 抗体・ワクチンセンター
		阪野 勝久	阪野クリニック
		渡部 秀人	富山市民病院 内科
		澤岡 均	(株)クボタ本社 阪神事務所
		矢崎 俊二	百合ヶ丘総合病院 神経内科
		新井 桂子	あらいクリニック
		東條 美奈子	北里大学医学部 循環器内科学
		大野 城太郎	箕面市立病院
		梶原 祐策	医療法人芙蓉会 村上病院
		城下 智	信州大学医学部 内科学第二
Local Nominations Committee	委員長	平和 伸仁	横浜市立大学附属病院 市民総合医療センター 腎臓・高血圧内科
	副委員長	永山 正雄	国際医療福祉大学熱海病院 神経内科
		羽田 俊彦	武蔵野赤十字病院 臨床検査部
		伊藤 孝史	島根大学医学部内科学第四 腎臓内科
		倭 正也	りんくう総合医療センター 総合内科・感染症内科
		安尾 和裕	旭川医療センター 総合内科
Scientific Program Committee	委員長	柴垣 有吾	聖マリアンナ医科大学 腎臓高血圧内科
	副委員長	東 光久	白河厚生総合病院 総合診療科
		栗田 宣明	福島県立医科大学附属病院 臨床研究教育推進部
		八田 告	八田内科医院
		赤井 靖宏	奈良県立医科大学附属病院 リウマチセンター
		宇都宮 雅子	東京医科歯科大学 膠原病・リウマチ内科
		志水 英明	中部ろうさい病院 腎臓内科
		林 幹雄	筑波メディカルセンター病院 総合診療科
		吉野 俊平	飯塚病院 総合診療科
		濱口 杉大	江別市立病院 総合内科
		森 温子	聖マリアンナ医科大学
		山本 舜悟	神戸大学
	Finance Committee	委員長	白杉 由香理
副委員長		武田 裕子	順天堂大学医学部 医学教育研究室
Health and Public Policy Committee	委員長	小山 雄太	日本海総合病院 腎臓膠原病内科
	副委員長	小野 宏	国立病院機構熊本医療センター 呼吸器内科
		吉田 博	東京慈恵会医科大学附属柏病院 総合診療部
		宮田 仁美	京都桂病院 腎臓内科
		後藤 洋平	函館市医師会病院 循環器科
		郷間 巖	堺市立総合医療センター
		西田 隆	川口さくら病院
		徳田 安春	JCHO 本部
		伊藤 公人	大同病院
Public Relations Committee	委員長	安藤 聡一郎	安藤医院
	副委員長	大島 康雄	ノバルティス ファーマ株式会社 開発本部 安全性情報部
		板東 浩	きたじま田岡病院 / 徳島大学
		中田 壮一	市立豊中病院 内科
		井上 直紀	はとがや病院 内科
		平野 昌也	平野内科クリニック
		小野 広一	因島医師会病院 内科
		森島 祐子	筑波大学 医学医療系 呼吸器内科
		川名 正敏	東京女子医科大学病院 卒後臨床研修センター 循環器内科
		川田 秀一	川田内科医院
		鈴木 克典	産業医科大学病院 感染制御部
		原 真純	帝京大学医学部附属溝口病院 第四内科
		荒牧 昌信	あらかま内科クリニック
		西村 光滋	西伊豆健育会病院 内科
		宮地 真由美	まみ内科クリニック
		萩野 昇	帝京大学ちば総合医療センター 内科
		森 雅紀	聖隷三方原病院 緩和ケアチーム
		北野 夕佳	聖マリアンナ医科大学 救命救急センター
		福地 貴彦	自治医大附属さいたま医療センター 総合診療科
		川島 彰人	新百合ヶ丘総合病院 総合診療科
		森本 勝彦	奈良県総合医療センター 腎臓内科
	森 伸晃	東京医療センター 総合内科	

○ 委員会名簿(2016年度)②

委員会	役職	氏名	所属
Early Career Physicians Committee	委員長	萩野 昇	日本医科帝京大学ちば総合医療センター 内科
	副委員長	森 雅紀	聖隷三方原病院 緩和ケアチーム
		北野 夕佳	聖マリアンナ医科大学 救命救急センター
		福地 貴彦	自治医大附属さいたま医療センター 総合診療科
		川島 彰人	新百合ヶ丘総合病院 総合診療科
		森本 勝彦	奈良県総合医療センター 腎臓内科
		森 伸晃	東京医療センター 総合内科
International Exchange Program Committee	委員長	矢野(五味)晴美	筑波大学大学院 人間総合科学研究科医学系専攻
	副委員長	牧石 徹也	済生会滋賀県病院 腎臓内科
		小原 まみ子	亀田総合病院 腎臓高血圧内科
		佐々木 徹	佐々木内科医院
		今井 直彦	聖マリアンナ医科大学 横浜市西部病院 腎臓・高血圧内科
		筒泉 貴彦	明石医療センター 総合内科
		田川 美穂	奈良県立医科大学附属病院 第1内科
		金城 光代	沖縄県立中部病院
Resident Fellow Committee	委員長	上月 友寛	神戸市立医療センター中央市民病院 総合内科
	副委員長	花本 明子	市立福知山市民病院 総合内科
		多賀谷 知輝	中部ろうさい病院
		添野 祥子	白河総合診療アカデミー
		鶴木 友都	飯塚病院 総合診療科
	アドバイザー	志水 英明	中部ろうさい病院 腎臓内科
	アドバイザー	吉野 俊平	飯塚病院 総合診療科
	アドバイザー	片岡 裕貴	兵庫県立尼崎総合医療センター 呼吸器内科
	担当理事	福原 俊一	京都大学大学院医学研究科 医療疫学分野
Student Committee	委員長	百木 菜摘	金沢大学
		福岡 翔	藤田保健衛生大学
		福地 芳浩	藤田保健衛生大学
		和田 周平	名古屋大学
		桜井 勇明	名古屋大学
		秋元 隆宏	東北大学
	アドバイザー	武田 裕子	順天堂大学医学部 医学教育研究室
	アドバイザー	白杉 由香理	東海大学医学部 内科学系血液腫瘍内科学
	アドバイザー	上野 文昭	大船中央病院
	アドバイザー	高橋 和男	藤田保健衛生大学
アドバイザー	鯉淵 典之(非会員)	群馬大学大学院 医学系研究科応用生理学分野	

## ○ 委員プロフィール紹介 Credentials/Membership Committee

\*自己紹介文を頂けた委員の先生方をご紹介します  
委員一覧は17ページの一覧をご参照下さい

### Chairperson



**Eiji SHINYA**, MD, PhD, FACP  
Microbiology and Immunology,  
Nippon Medical School

Yes, we can.



**Katsuhisa Banno**, MD, PhD, FACP, FCCP  
President & CEO  
Banno Clinic

Change before you have to.

### **Shunji Yasaki**, MD, PhD, FJSIM, FACP

Director of Department of Neurology  
Shin-yurigaoka General Hospital, Kawasaki, Japan

My message to the doctors in early career: Because patients are the sources of my passion, I want to do my best as a medical doctor.



### **Hitoshi Sawaoka**, MD, FACP, PhD

Director,  
Sawaoka Industrial Health Consultant Office

My message to the doctors of ACP members. Let's take part in ACP activities globally. You can have wonderful experiences.



### **Hideto Watanabe**, MD, PhD, FACP, FCCP

Internal Medicine,  
Toyama City Hospital

I hope to fill up the first judge the Fellow of ACP, though I am a immature committee.



### **Minako Yamaoka-Tojo**, MD, PhD, FACP

Associate Professor,  
Allied Health Sciences, Kitasato University

The best way to predict the future is to create it.



### **Satoru Joshita**, MD, PhD, FACP

Assistant Professor,  
Department of Medicine, Division of Gastroenterology  
and Hepatology, Shinshu University School of Medicine

Become an internist with a subspecialty while engaging in scientific activity and education to improve medicine.



### **Yusaku Kajihara**, MD, FACP

Department of Gastroenterology,  
Fuyoukai Murakami Hospital

Your affiliation doesn't necessarily ensure your ability as a physician. In any hospital or clinic, it is important to make unflagging efforts.

## ○ Health and Public Policy Committee

### Chairperson



### **Yuhta Oyama**, MD, FJSIM, FACP

Chief, Division of Nephrology and Rheumatology,  
Department of Internal Medicine  
Nihonkai General Hospital

- 1) Anytime things appear to be going better, you have overlooked something.
- 2) Life can only be understood backwards, but it must be lived forward.



### **Hitomi Miyata**, MD, PhD, ACP member

Chief, Department of Nephrology  
and Dialysis Unit Kyoto Katsura Hospital

Part of being optimistic is keeping one's head pointed toward the sun,  
one's feet moving toward( by Nelson Mandela)  
Find Purpose, the means will follow(by Mahatma Gandhi)



### **Hiroshi Yoshida**, MD, PhD, FAHA, FACP

Professor, Department of Laboratory Medicine,  
Jikei University School of Medicine  
Professor, Internal Medicine of Metabolism and Nutrition,  
Jikei University Graduate School of Medicine  
Deputy Director, Jikei University Kashiwa Hospital

My favorite words of wisdom are as follows.

- All our dreams can come true, if we have the courage to pursue them.
- Chance and serendipity in science deserve co-authorship at several points along the zigzag pathway.
- It's a small world after all.
- The important thing is not to stop questioning.

### Vise-chairperson



### **Hiroshi Ono**, MD, Ph.D, FCCP, FACP

Physician-in-Chief of Pulmonary Medicine  
Physician-in-Chief of Infectious Diseases  
National Hospital Organization Kumamoto Medical Center

"The needs of the patient come first." the primary value of Mayo Clinic is also core of my practice as a physician.



### **Masato Ito**, MD, PhD

Chief of a department of hematology and chemotherapy,  
oncology Daido Hospital

My motto is "Medicine is a science of uncertainty and an art of probability." quoted from Dr Osler's words. What I always bear in mind are "be always conscious of Dr's professionalism" and "learn and do everything which could remedy patient's pain."



### **Yohei Goto**, MD, ACP member

Hakodate Medical Association Hospital

Happiness depends upon ourselves.

○ 委員プロフィール紹介 Local Nomination Committee

\*自己紹介文を頂けた委員の先生方をご紹介します  
委員一覧は 17 ページの一覧をご参照下さい

Chairperson



**Nobuhito Hirawa**, MD, PhD, FACP, FAHA, FJMSIM, FJSH

Director, Division of Hemodialysis and apheresis Hypertension  
Associate professor, Department of Nephrology and  
Hypertension Yokohama City University Medical Center

Love the life you live. Live the life you love. (Bob Marley)  
Stay hungry, stay foolish. (Steve Jobs)  
The two wise sayings seem the opposite, but are important and attractive.



**Takafumi Ito**, MD, PhD, FACP, FJMSIM

Medical Professor, Director  
Division of Nephrology, Shimane University Hospital

Never Give Up!!



**Masaya Yamato**, MD, PhD,

Director, Division of General Internal Medicine and  
Infectious Diseases  
Director, Center for Infectious Diseases Rinku General  
Medical Center

Think Globally, Act Locally!



**Mamiko Ohara**, MD, PhD, FACP, FASN

Director, Internal Medicine Education  
Chief, Department of Nephrology Kameda Medical Center

My message to the doctors in early career. You can accomplish more  
than 80 percent of what you think you can't achieve, with your earnest effort.

Vise-chairperson



**Masao Nagayama**, MD, PhD, FAAN, FJMSIM

Vice-Director, International University of Health and  
Welfare (IUHW) Atami Hospital  
Professor, Department of Neurology, IUHW Atami Hospital

Be passionate and truly professional



**Kazuhiro Yasuo**, MD, FACP

Chief, department of General Internal Medicine  
National Health Organization Asahikawa Medical Center

To young doctors, to my sons, and to myself, "Be ambitious".



**Toshihiko Hata**, MD, PhD, FJMSIM, FACP

Chief, Department of Nephrology  
National Hospital Organization Disaster Medical Center  
Clinical Professor, Tokyo Medical and Dental University

I am looking for where the streets have no name.

○ 委員プロフィール紹介 Resident Fellow Committee

\*委員一覧は 18 ページの一覧をご参照下さい

Chairperson



**Tomohiro Kozuki**, MD, ACP Member,

Resident in General Internal Medicine,  
Kobe City Medical Center General Hospital

See one, do one, teach one. Teaching is learning twice.

**Tomoki Tagaya**, ACP Member

Departments of Nephrology, and Rheumatology,  
Chubu Rosai Hospital

We use MKSAP etc. self-study.

**Yuki Kataoka**, MD, MPH, ACP Member

Department of Respiratory Medicine  
Hyogo Prefectural Amagasaki General Medical Center

Through clinical research education, I would like to improve clinical  
practice in Japan.

**Shoko Soeno**, MD

General Internal Medicine, Shirakawa STAR(Satellite for  
Teaching And Research), Fukushima Medical University

Shirakawa STAR is one of CIRC<sup>2</sup>LE\* STARS.

\*CIRC<sup>2</sup>LE: Center for Innovative Research for Communities and  
Clinical Excellence

Our senior residency programs focus on both general medicine and  
clinical research. We are aiming to "create" evidence needed to  
effectively serve the elderly.

○委員プロフィール紹介 Student Committee

\*自己紹介文を頂けた委員の先生方をご紹介します  
委員一覧は 18 ページの一覧をご参照下さい

Chairperson

**Natsumi Momoki,** Student Member  
Medical student Kanazawa University

The sky is the limit. Important thing is to step out my comfort zone and carry out my own decisions.

**Yoshihiro Fukuchi,** Student Member  
Undergraduate student, Fujita Health University

All for a patient.

**Yomei Sakurai,** Student Member  
Medical student, Nagoya City University of Medicine

From now on, I would like to learn medicine under various environments. And to share the knowledge, skills and my idea about medicine with various people, I would like to tackle the task related on medical education.



**Sho Fukuoka,** Student Member  
Fujita Health University

It always seems impossible until it's done.



**Shuhei Wada,** Student Member  
Student at Nagoya University Medical School

I want to work as a family doctor in Shimane Prefecture ,my hometown.



**Takahiro Akimoto,** Student Member  
Medical student, Tohoku University School of Medicine

I strongly believe the importance of family doctor. My desire is to be an open-minded doctor people are easy to ask advice or guidance concerning health whenever they like to.

## ○編集後記

今回も無事ニュースレターを発行することができまして、お忙しい中原稿を執筆いただきました先生方、編集作業に関わっていただきました方々に御礼申し上げます。編集作業は新年の気分がようやく抜けた2月のまだ寒い時期から始まりましたが、お届けできるのはソメイヨシノのつぼみが少し大きくなり始める頃でしょう。

今回は今年の米国内科学会日本支部の年次総会の紹介、国際交流プログラムとして1ヵ月程の臨床研修へ参加された先生方から

の報告、新たに FACP に昇格された先生方からのメッセージに加え、本学会日本支部の各委員会の活動についてご紹介しています。それぞれの委員会は重要な役割を担っておりますが、私自身それぞれの委員会の具体的な活動内容を把握できておらず、今回初めて知った事も多く興味深く拝読させていただきました。

今回お届けします活動報告は、学会としてどういう活動をしているのかを理解する上で大変貴重な資料です。

(Public Relations Committee 副委員長 大島康雄)



### ACP 日本支部 Public Relations Committee

委員長：安藤聡一郎（安藤医院）、副委員長：大島康雄（ノバルティス ファーマ株式会社 開発本部安全性情報部）、  
委員：荒牧昌信（あらまき内科クリニック）、井上直紀（Dana-Farber Cancer Institute）、小野広一（力田病院 内科）、  
川田秀一（川田内科医院）、川名正敏（東京女子医科大学 総合診療科）、鈴木克典（産業医科大学病院 感染制御部）、  
中田壮一（市立豊中病院 内科）、西村光滋（西伊豆健育会病院 内科）、原真純（帝京大学医学部附属溝口病院 第四内科）、  
板東浩（きたじま田岡病院／徳島大学）、平野昌也（平野内科クリニック）、宮地真由美（まみ内科クリニック）、  
森島祐子（筑波大学医学医療系 呼吸器内科）